

学位論文要旨

対照的視点による日韓アスペクト形式の研究

広島大学大学院教育学研究科

文化教育開発専攻（日本語教育学分野）

D142812

李 在鉉

I. 論文題目

対照的視点による日韓アスペクト形式の研究

II. 論文構成（目次）

第1章 序論

- 1.1 研究の動機と目的
- 1.2 本研究の立場
- 1.3 本研究の構成

第2章 先行研究

- 2.1 日本語と韓国語のアスペクト形式の対応関係に関する研究
- 2.2 日本語と韓国語のアスペクト形式の使用基準に関する研究
- 2.3 韓国人日本語学習者の誤用に関する研究

第3章 日本語の「-テイル」とそれに対応する韓国語の形式

- 3.1 問題の所在
- 3.2 調査の概要
- 3.3 調査の結果および考察
- 3.4 本章のまとめ

第4章 日本語と韓国語の結果状態形の使用基準の違い

- 4.1 問題の所在
- 4.2 日本語の結果状態形と韓国語との対応関係および、その使用場面
- 4.3 日本語と韓国語の結果状態形の使用基準
- 4.4 先行研究とのつながり
- 4.5 本章のまとめ

第5章 韓国人日本語学習者の「-タ」形と「-テイル」形の選択傾向

- 5.1 問題の所在
- 5.2 調査の概要
- 5.3 調査の結果および考察
- 5.4 本章のまとめ

第6章 結論と今後の課題

- 6.1 本研究の結論
- 6.2 日本語教育への提言
- 6.3 今後の課題

参考文献

用例出典

Ⅲ. 論文要旨

第1章 序論

日本語と韓国語は、進行状態を言う場面や結果状態を言う場面において、次のような違いが見られる。

(1) (ふと窓の外を見たら雨が降っている。それを見て)

a. 雨 { ?降る / 降ってる }。

b. bi { o-n-da / ?o-go iss-da } .

雨 降る-非過去-語尾 降る-進行状態-語尾 (作例)

(2) (友達のカバンが開いているのを見てすぐ)

a. カバン { ?開いたよ / 開いてるよ }。

b. gbang { yeoli-eoss-da / ?yeoli-eo iss-da } .

カバン 開く-過去-語尾 開く-結果状態-語尾 (作例)

日本語と韓国語のAspectに関する研究や韓国人向けの日本語教科書では、日本語の「テイル」形は、韓国語の「-go iss-da」「-eo iss-da」形に対応するとされている。しかし、(1)と(2)からわかるように、日本語の「-テイル」形は韓国語の「-n-da」形・「-eoss-da」形にも対応している。それにもかかわらず、「-go iss-da」形・「-eo iss-da」形に対応するとされているのは、日本語の「-テイル」は基本的には韓国語の「-go iss-da」形・「-eo iss-da」形に対応しているからなのだろうか。

また、韓国人日本語学習者には、結果状態を言う場面で(3a)のように「-テイル」形を使用すべきところで「-タ」形を使用する誤用が見られる。

(3) (一緒に食事をしている友達の頬にご飯粒が付いている。それに気づいて、友達に)

a. ほっぺたに、なにか付いたよ。

(N1、学習歴：10年9ヶ月、滞在歴：1年4ヶ月)

b. 日本語：ほっぺたに、なにか { ?付いたよ / 付いてるよ }。

c. 韓国語：bol-e、mwo { mud-eoss-eo / ?mud-eo iss-eo }。

ほっぺた-に なに 付く-過去-語尾 付く-結果状態-語尾

(3) のような場面は、日本語では (3b) のように、結果状態を表す「-テイル」形を使うのが自然であるが、韓国語では (3c) のように「-eoss-da」形を使用する方が自然である。このように、結果状態場面においては、日本語と韓国語の結果状態形（「-テイル」「-eo iss-da」）の使用基準が違ふことが窺える。では、結果状態を言う場面における日本語と韓国語の結果状態形の使用基準は、どのように違ふのだろうか。

さらに、(3a) のような誤用は、韓国語では過去形の使用が自然であるため、日本語の過去形を使用した誤用であると考えることができる。それでは、韓国人学習者は、どのような結果状態場面で母語の影響による誤用が生じやすいのだろうか。

以上の問題意識から、本研究では以下の3点を明らかにすることを目的とする。

課題1 日本語の「-テイル」形は、基本的には韓国語の「-go iss-da」「-eo iss-da」形と対応し、ある特定の場面に韓国語の「-n-da」「-eoss-da」と対応するのか。

課題2 結果状態場面における日本語と韓国語の結果状態形の使用基準は、どのように違ふのか。

課題3 韓国人学習者が結果状態を言う場合、どのような場面で母語干渉による誤用が生じやすいのか。

第2章 先行研究

2.1 日本語と韓国語のアスペクト形式の対応関係に関する研究

李 (2010)、김 (キム) (2016)、小出 (2000)、柴 (1993) などでは、日本の小説とその韓国語翻訳本を用い、日本語と韓国語のアスペクト形式の対応関係について検討している。その結果、日本語の「-テイル」形は、主に韓国語の「-go iss-da」形・「-eo iss-da」形・「-n-da」形・「-eoss-da」形に対応していると報告されている。日本語の「-テイル」形は基本的に韓国語の「-go iss-da」「-eo iss-da」形と対応するのかという観点から考えると、日本語の「-テイル」形

は複数の韓国語の形式に対応していることを指摘することにとどまっている。韓国人日本語学習者の立場から考えると、どのような韓国語の形式が基本的には日本語の「-テイル」形に対応するのかについて考察する必要があると考えられる。

2.2 日本語と韓国語のアスペクト形式の使用基準に関する研究

日本語と韓国語の過去形と結果状態形の使用基準について関する先行研究（井上ほか 2002、生越 1995・1997）では、日本語の場合には見解が一致しているが、韓国語の場合には先行研究（井上ほか 2002、生越 1995・1997、キム 2016、崔 2010）によって説明が異なっている。特に、韓国語の過去形と結果状態形がどちらも使用できる場合、納得のいく説明がなされていない。先行研究では日本語と韓国語の過去形と結果状態形の使用場面に違いがあることが明らかになっているものの、日本語と韓国語の過去形と結果状態形の使用基準の違いについては、まだ不明なところが多い。韓国の日本語教育現場では、【日本語の結果状態形「-テイル」＝韓国語の結果状態形「-eo iss-da」】のように教えられていることから、結果状態場面における日本語と韓国語の過去形と結果状態形の対応関係と使用場面に注目し、さらなる考察を行う必要がある。

2.3 韓国人日本語学習者の誤用に関する研究

小野里・イ（イ）（2008）と孫（2012）は韓国人日本語学習者の誤用の傾向やその原因について考察している。その結果、両研究とも、韓国語では過去形が自然な場面に、日本語の「-タ」形を選択する傾向があることから、韓国人日本語学習者は母語の影響により韓国語で過去形が自然な結果状態場面に「-タ」形を使用する誤用が生じやすいと結論づけている。しかし、どのような結果状態場面に、日本語では結果状態形が自然で、韓国語では過去形が自然であるのかについては説明されていない。韓国人日本語学習者はどのような結果状態場面に「-タ」形を使用する誤用が生じやすいのかについて考察する必要がある。

第3章 日本語の「-テイル」とそれに対応する韓国語の形式

第3章では、日本人が翻訳した韓日対訳シナリオ集を用い、日本語の「-テイル」形が、基本的に韓国語の「-go iss-da」「-eo iss-da」形と対応するのかについて調査を行った。

表1 日本語の「-テイル」形と韓国語の形式との対応関係の全体的な傾向

対応関係		【会話文】 = 772 文		【地の文】 = 1,943 文	
「 テ イ ル 」 形	「-n-da」形	504	593	386	401
	「-eoss-da」形	89	(77%)	15	(21%)
	「-go iss-da」形	138	179	868	1,542
	「-eo iss-da」形	41	(23%)	674	(79%)

表1からわかるように、【会話文】では、「-テイル」形と「-n-da」形・「-eoss-da」形との対応（77%）の方が顕著に多かった。「-テイル」形と「-go iss-da」形・「-eo iss-da」形との対応は、ある出来事や状況を説明・描写するといった特定の場面に限って見られた、一方、【地の文】では、「-テイル」形と「-go iss-da」形・「-eo iss-da」形の対応（79%）が顕著に多く見られた。これは、場面や登場人物の動作・心理状態などを説明・描写するという【地の文】の特徴に起因すると考えられる。このことから、「-テイル」形は、基本的に「-n-da」形・「-eoss-da」形に対応し、「-go iss-da」形・「-eo iss-da」形との対応は特定の場面に限って見られると考えることができる。

第4章 日本語と韓国語の結果状態形の使用基準の違い

第4章では、結果状態における日本語と韓国語の結果状態形の使用基準の違いについて、対応関係と使用場面に注目し考察を行なった。韓国語で結果状態形が使用され、日本語訳で結果状態形となっている例を詳細に検討すると、いずれも、①話し手と聞き手の認識に違いがある場面、あるいは、②話し手が持っている情報が聞き手にはない場面のいずれかであった。①②のような場合は、日本語では過去形に言い換えができないが、韓国語では過去形への言い換えができる。また、韓国語で過去形が使用され、日本語訳で結果状態形となっている例は、話し手が初めて見た結果状態を聞き手に言う場面であった。このような場面では、日本語では過去形が使用できないが、韓国語では過去形のほうがむしろ自然であり、結果状態形への言い換えができない。

表2 日本語の結果状態形と韓国語との対応関係およびその場面と言い換えの可否

対応関係		場面	言い換え
「 テ イ ル 」 形	「-eo iss-da」形	①話し手の認識と聞き手の認識に違いがある。	「-eoss」に 言い換え不可
		②話し手が持っている情報が聞き手にはない。	
	「-eoss-da」形	話し手が初めて見た結果状態を聞き手に言う。	「-eo iss-」に 言い換え可

表2からわかるように、結果状態場面を言うとき、韓国語では、基本的に過去形「-eoss-da」が使用され、結果状態形「-eo iss-da」は、話し手と聞き手との「情報や知識の違い（以下、「認識のずれ」と呼ぶ）」がなければ使用できないと考えられる。

このことから、日本語の結果状態形は認識のずれがあるかどうかにかかわらず「変化の瞬間あるいは変化の前後の状態を把握していない」とき（井上ほか 2002）に使用されるのに対して、韓国語の結果状態形は「認識のずれがある」ときに使用されると結論付けられる。

第5章 韓国人日本語学習者の「-テイル」形と「-テイル」形の選択傾向

第5章では、「A. 認識のずれが感じにくい6場面（①発話時に初めて見た眼前の結果状態3場面＋②対話の場で初めて気づいた結果状態3場面）」と「B. 認識のずれが感じやすい6場面（③話し手の認識と違った眼前の結果状態3場面＋④話し手の認識と違った聞き手の認識3場面）」の計12場面を用い、日本語母語話者（JNS）と韓国語母語話者（KNS）・韓国人日本語学習者（K-N1, 2, 3）を対象にアンケートを行った。

韓国語の場合、Aの場面では過去形が選好され、Bの場面では、単に結果状態を述べるときは過去形が使用され、話し手の認識と結果状態とのずれを言い立てるときは、結果状態形が使用される。一方、日本語ではAとBの場面ともに、変化の瞬間あるいは変化の前後の状態を把握していないため、結果状態形が使用される。よって、第4章の結論が正しければ、日本語母語話者はAとBの場面において結果状態形を選択し、韓国語母語話者と韓国人日本語学習者は、Aの場面に比べ、Bの場面のほうが、結果状態形の選択が増加すると予想される。

表3は、アンケート調査の結果をまとめたものである。

表3 日本語母語話者（JNS）と韓国語母語話者（KNS）、韓国人日本語学習者（K-N1, 2, 3）の傾向

調査参加者		場面	A. 認識のずれ感じにくい			B. 認識のずれ感じやすい		
			①の場面	②の場面	総計	③の場面	④の場面	総計
JNS 56名	「-タ」	8(5%)	0(0%)	8(2%)	4(2%)	0(0%)	4(1%)	
	「-テイル」	160(95%)	168(100%)	328(98%)	164(98%)	168(100%)	332(99%)	
KNS 60名	「-eoss-da」	135(75%)	156(87%)	291(81%)	56(31%)	22(12%)	78(22%)	
	「-eo iss-da」	45(25%)	24(13%)	69(19%)	124(69%)	158(88%)	282(78%)	
K-N1, 2, 3 84名	「-タ」	106(42%)	64(25%)	170(34%)	49(19%)	43(17%)	92(18%)	
	「-テイル」	146(58%)	188(75%)	334(66%)	203(81%)	209(83%)	412(82%)	
K-N1 47名	「-タ」	41(29%)	37(26%)	78(28%)	19(13%)	10(7%)	29(10%)	
	「-テイル」	100(71%)	104(74%)	204(72%)	122(87%)	131(93%)	253(90%)	
K-N2 24名	「-タ」	40(56%)	13(18%)	53(37%)	17(24%)	18(25%)	35(24%)	
	「-テイル」	32(44%)	59(82%)	91(63%)	55(76%)	54(75%)	109(76%)	
K-N3 13名	「-タ」	25(64%)	14(36%)	39(50%)	13(33%)	15(38%)	28(36%)	
	「-テイル」	14(36%)	25(64%)	39(50%)	26(67%)	24(62%)	50(64%)	

日本語母語話者は、Aの場面で総計8名(2%)、Bの場面で総計4(1%)名が「-タ」形を選択しているが、全体的には、予測通り「-テイル」形を選択する傾向が顕著に見られた。一方、韓国語母語話者は、予測通りBの場面(総計282名(78%))のほうがAの場面(総計69名(19%))より「-テイル」形の選択が増加している。これは、韓国語母語話者は結果状態を言う際に「話し手の認識と外部世界とのずれの有無」により、過去形「-eoss-da」と結果状態形「-eo iss-da」の選択を変えるという第4章の結論を支持する結果である。次に、韓国人日本語学習者は、レベルによって多少傾向の違いはあるが、予測通りBの場面(総計412名(82%))のほうがAの場面(総計334名(66%))より「-テイル」形の選択が増加している。このことから、韓国人日本語学習者は、結果状態を言う際に、「話し手の認識と外部世界とのずれの有無」の違いにより、「-タ」形と「-テイル」形の選択を変えると考えられる。つまり、韓国人日本語学習者は、結果状態を言う際に韓国語の結果状態形の使用基準をそのまま日本語に当てはめている可能性がある。

N1レベルの韓国人日本語学習者(K-N1)の各場面における「-テイル」形の選択率は、Bの場面(③、④)では約90%になっているが、Aの場面(①、②)では約70%になっている。このことから、NNS-N1にとっては、「話し手の認識と外部世界とのずれがない」場面に比較的誤用が生じやすいと考えられる。

N2レベルの韓国人日本語学習者(K-N2)の各場面における「-テイル」形の選択率は、②・③・④の場面では約80%であるが、①の場面では約40%となっている。このことから、K-N2にとっては、特に「①初めて見た眼前の結果状態」を言う際に誤用が生じやすいと考えられる。

N3レベルの韓国人日本語学習者(K-N3)の各場面における「-テイル」形の選択率は、全体的に60%台と低いことから、K-N3はすべての結果状態を言う場面において誤用が生じやすいと考えられる。

以上のことから、韓国人日本語学習者は、全体的に「発話時に初めて見た結果状態を言う場面」に「-タ」形の選択がもっとも多かった。結果状態を表す「-テイル」が初級レベルで導入されることを考えれば、N1・N2レベルになっても約10~30%が「-タ」形を選択していることと、N3レベルは正解率(=「-テイル」形の選択率)が60%台と非常に低いことから、結果状態を表す「-テイル」は韓国人学習者にとって習得が難しい項目であると考えられる。

第6章 結論と今後の課題

6.1 本研究の結論

課題1については、日本語の「-テイル」形と韓国語の「-go iss-da」形・「-eo iss-da」形の対応は、「話し手が発話時以前にすでに持っていた情報・知識を、それを知らない聞き手に言う」

といった特定の場面に限られており、基本的には韓国語の「-n-da」形・「-eoss-da」形と対応すると言える。

課題 2 については、日本語の結果状態形「-テイル」は「変化の瞬間あるいは変化の前後の状態を把握していない」ときに使用する（井上ほか 2002）が、韓国語の結果状態形「-eo iss-da」は「話し手の認識と外部世界（聞き手の認識、もしくは眼前の状態）とのずれがある」ときに使用すると言える。

課題 3 については、①韓国語母語話者と韓国人日本語学習者は、結果状態を言う際に、「話し手の認識と外部世界とのずれの有無」により、過去形（「-eoss-da」「-タ」）形と結果状態形（「-eo iss-da」「-テイル」）の選択を変えることがわかった。このことから、韓国人日本語学習者は、結果状態を言う際に韓国語の結果状態形の使用基準をそのまま日本語に当てはめている可能性があることが実証された。②韓国人日本語学習者は、全体的に「発話時に初めて見た結果状態を言う場面」に「-タ」形の選択が多かった。結果状態を表す「-テイル」が初級レベルに導入されることを考えれば、N1・N2 レベルになっても約 10～30%ほど「-タ」形を選択していることと、N3 レベルは正解率（＝「-テイル」形の選択率）が 60%台と非常に低いことから、結果状態を表す「-テイル」は、韓国人学習者にとって習得が難しい項目であると考えられる。

6.2 日本語教育への提言

以上のことから、韓国人日本語学習者の誤用を防ぐには、韓国語の感覚に合わせた説明が必要となると考えられる。具体的には、韓国語では「発話の場面において結果状態を初めてみた場合」に過去形が使用され、「自分または聞き手が持っている情報・知識が事実と違うことを言う場合」には過去形も結果状態形も使用されるが、日本語ではどちらの場面でも結果状態形の「-テイル」形を使用することを明示的に指導する必要がある。

6.3 今後の課題

残された課題の主だったものを以下に挙げる。

第 3 章では、文末における日本語と韓国語のアスペクト形式の使用の違いについて考察を行ったが、文中においても両言語のアスペクト形式の使用の違いが見られるため、検討する必要があると考えられる。また、第 4 章では【会話文】を中心とし分析を行ったが、【地の文】において「話し手の認識と外部世界とのずれの有無」という基準で、韓国語と日本語の結果状態形の使用基準が説明できるか検証の余地がある。さらに、第 5 章では、韓国人日本語学習者の誤用が生じやすい場面を分類したものの、その場面について習熟度別に考察をするまでには至らなかった。日本語の習熟度によって誤用が生じやすい場面が変わるか否かを検討することで、アスペクト形式の選択傾向と中間言語体系との関係を明らかにすることが可能になると考える。最後に、

本研究では、日本語と韓国語の結果状態の使用基準の違いを述べることにとどまっている。そもそも、日本語と韓国語のアスペクト形式の使用基準に、このような違いが生じる原因について考察することも大きな課題の一つである。

参考文献

- 李忠均 (2010) 「日韓両言語のアスペクト形式の様相に関する研究—翻訳書を中心に—」『日本語学論集』6、東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室、pp. 24-37
- 井上優・生越直樹・木村英樹 (2002) 「テンス・アスペクトの比較対照—日本語・朝鮮語・中国語」生越直樹 (編)『シリーズ言語科学 4 対照言語学』東京大学出版会、pp. 125-145
- 生越直樹 (1995) 「朝鮮語 hayssta 形、hay issta 形 (hago issta 形) と日本語シタ形、シテイル形」『研究報告集』16、国立国語研究所、pp. 185-206
- (1997) 「朝鮮語と日本語の過去形の使い方—結果状態との関連を中心にして」『日本語と外国語の対照研究IV 日本語と朝鮮語 下巻：研究論文編』国立国語研究所 (編)、くろしお出版、pp. 139-152
- 小野里恵・이 (イ) 정숙 (2008) 「日本語のテンス・アスペクト表現における韓国人日本語学習者の誤用分析」『日語日文学』40、大韓日語日文学会、pp. 91-107
- 小出亜弥 (2000) 「「～ている」と「～고/어 있다」に関する一考察」『日本語教育』17、韓国日本語教育学会、pp. 229-249
- 柴公也 (1993) 「「～ている」の意味と用法について—対応する韓国語の表現との対照研究—」『日本学報』32、韓国日本文化学会、pp. 139-152
- 孫東周 (2012) 「韓国人学習者の結果状態に関する誤用要因分析」『日語日文学』55、大韓日語日文学会、pp. 79-89
- 崔榮殊 (2010) 「「結果状態」を表す韓国語の -eoss- と -eo iss- の使い分け」『朝鮮語研究』4、朝鮮語研究会、pp. 5-75
- 김 (キム) 효신 (2016) 『韓・日 両国語의 時相 対照研究-「v ている」의 対応様相을中心으로-』데그카トリク大学校大学院 日語日文学科 博士学位論文